

令和4年度富山県アルコール健康障害対策関係者会議結果（概要）

1 日 時 令和5年2月10日（金）19：00～20：30

2 場 所 富山県民会館 704 会議室

3 出席者 委員9名

4 議 事

○富山県アルコール健康障害対策推進計画最終評価（案）について

○富山県アルコール健康障害対策推進計画（第2期）（素案）について

5 会議結果

○委員の互選により、吉本委員を会長に選出した。

○本日の協議を踏まえ、事務局において素案を修正し、会長が確認した上でパブリックコメント手続に付することを了承した。

主な意見

◆現計画最終評価に関する意見（資料1）

○「妊娠中の飲酒をなくす」という指標について、目標値が「0%」となっている。思い切った数値とを感じるが、計画に「0%」として出したのは何か理由があるのか。
→国の基本計画においても「0%」にするという目標値を定めている。妊娠中の飲酒をなくすことの取組みは今後も続けていくという意味合いで、全国と同様「0%」と設定した。

○県医師会では、県と共催で、かかりつけ医の先生方に対する依存症対応力向上研修会を年1回開催している。一般診療医と精神科医の連携についてということで、開業医の先生や一般内科のクリニック等の先生方に多く参加をいただいている。この研修会は非常に有意義なものだと考えている。

◆第2期計画（素案）に関する意見（資料2～6）

○近年の問題と感ずるのが高齢者の飲酒である。認知症の問題にも関係する。アルコール依存症は50代が一番ピークであるが、一方で退職後の過ごし方がうまくいかず、高齢者の中で飲酒に走るという2パターンがある。高齢者はそういった危険性があることを普及啓発し、老年、介護分野と連携する必要がある。

○民間団体の活動に対する支援として「SBIRTS 普及促進セミナーの後援」と記載がある。富山県においては令和2年11月に行政医療の関係機関協力の下、SBIRTS 普及促進セミナーを実施した。このセミナーは全日本断酒連盟が進めているものであり、現在、未開催の県において優先的に開催している。第2期計画中の令和5年度から9年度までの間で富山県内においても1度開催することができるのか非常に不透明な状態である。「SBIRTS 普及促進セミナーの後援」の代わりに、例えば「研修会における後援や支援」という形にしていいただければと思う。

○定年退職をきっかけにアルコールに走っていく方やアルコール依存症として定義する状態までいかないが、非常に危険と感ずるケースは臨床の中でたくさんある。そのような方々への指導みたいなもののマニュアルがあればよいと思う。また、コロナ禍の影響により、集まりや人との繋がりがなくなり、アルコールに走る方も実

際多いのではと感じる。

- 若年層においてはアルコールの問題だけではなく、風邪薬（市販薬）への依存も増えている。アルコールと同時に色々なものが若年層の依存症を助長している。
- 高校生の飲酒は徐々に減少していると感じる。何十年前であれば飲酒して指導を受けるといようなことはあったが、最近はそういうことはない。宅飲み等で見えないだけで、必ずしもアルコール未摂取になっているのかというのはまた別問題だと思うが。また、将来、アルコールと付き合っていく方法として、自分のアルコール分解能力の有無についてパッチテストを保健の授業の中で取り入れている。
- 近年の企業側の努力もあり、ジュースみたいなお酒がたくさんあり、高校生の興味はそそられると思う。
- 18 歳～22 歳の大学生、短大生、専門学生といったところに特化した対策が重要だと思う。急性アルコール中毒や一気飲みの危険性認識のためにも若いうちから正しい知識と理解は必要。また、依存症にはオーバードーズ、ネット、ゲーム依存もある。ゲーム依存の方にはアルコール摂取している若者が多いということもある。
- 若者のアルコール離れは顕著に感じる。大学でのオリエンテーションやサークルリーダー会にてアルコールについて触れているが、アルコールがどのような影響を及ぼすか理解できていないと感じる。また、学生は「夜中のビールやチューハイのテレビ CM につられる」とよく言う。その点を何とかしたいと思う。大学入学時点でのアルコールに関する教育が大事である。
- 20 歳未満の飲酒は本来「0%」であるもの。20 歳未満の飲酒率の数値がとれないという理由で指標から削除してもよいものか。数値がとれなくても 20 歳未満の飲酒防止を啓発していくためにも指標として残した方がよいのではないか。
- 若者のオーバードーズについては学校薬剤師会においても取り上げている。市販薬依存症対応として薬局で販売制限を実施しているが自主努力でしかない。効きが早く、効果持続も長くなるため市販薬をチューハイで服用するケースもある。また、県薬剤師会としても昨年度アルコール依存症に関する研修会を実施しており意識は向上している。
- 薬局においても中高年の飲酒増加を感じる。配偶者が亡くなったり、50 代のひきこもりの子が親を亡くしたりすることで心の隙間をアルコールで埋めるケースあり。徐々に浮腫みが出て顔つきが変わったり、肝機能が低下し肝硬変に至ったケースもある。啓発活動等、最初のきっかけ作りが重要であると思う。ポスターは薬局に掲示することも可能。
- 市販薬やストロングチューハイと一緒に遊ぶ、エナジードリンクと一緒にお酒でトリップするといった若者がたくさんいる。自傷行為とセットになったり、セックスや暴力の問題と非常にリンクしやすかったりする。また、退職後の高齢者が非常にアルコールに対するアクセスが近いということも問題に思う。さらに、エナジードリンクと言われるアルコール飲酒に関する販売規制やCM規制はヘルスプロモーションの観点から然るべき対応が望ましい。
- 店舗にてノンアルコール飲料を購入するつもりが横にアルコール飲料が置いてあるとアルコール飲料を購入してしまうという方もいる。店舗にて陳列方法を変えることができればと思う。